

帰国後、知人の紹介で、ある有力会社に採用が内定しておりました。履歴書を持参、面接に行きますと、シベリア帰りとの理由で不採用になりました。思わず「バカヤロウ」と叫びたくなりましたが、思い直して町のあっせんて開拓地へ入り、農業、そして今は事業を始めて三十年、お蔭さまで成功いたしました。神様はやはり我々に味方をしてくれたと感謝しております。

## シベリアを偲ぶ

滋賀県 船川 廣 二

滋賀県に生まれ、小学校卒業後家業の手伝いを続ける中、徴用令により三菱重工業名古屋製作所に入所。昭和十九年十月三十一日、第三航空通信連隊第八中隊に配属さる。新品の軍服の支給を受ける。十一月五日第十一野戦航空補給隊に転属。十一月六日博多港出航、釜山へ向かう。

十九年十一月八日、満州国四平省四平街の兵舎に入

ると同時に古びた軍服と防寒衣を支給。新しい服は古参兵に。新兵に銃と帯剣を支給。三八式の銃、これで戦えるのかと不安になる。

兵舎の前に大きな倉庫が林立している。弾薬庫である。原野には非常に大きな穴が掘っており、燃料が野積みされている。我々はこれの警備で昼となく夜となく巡回を行う。

昭和二十年五月頃だったと思うが、時たまではあるが偵察機が飛来。それでも穏やかな軍隊生活を送っているつもりでいたが、近いうちにソ連軍が侵攻して来るかも知れんと全隊員に訓示された。その二日後の八月十五日、部隊長の命令で「全隊員ラジオの前に集合せよ」とのことで、陛下の玉音放送を聞かされ、更に涙を流しながらくわしく話された。「残念ながら戦いに敗れた」。全隊員ただ呆然としていた。「戦わずしてこの部隊は敗れた、部隊は解散しない」と言い渡された。武装解除されるまでは現地人の動静を心配されたのだった。

二十年八月十七日、遂に武装解除、そして一カ月余

り兵舎の使役で日を送る。

ついにソ連軍が「ダモイ東京」と笑いながらトラックでやって来た。何とダモイでなく黒龍江へと向けて、いくら叫んでも「戦いに敗れたんだから」と、黒龍江を渡河してトラックで貨車の駅まで運ばれた。二段式有蓋車に畜生同然の扱いだつた。これが昭和二十年十月初旬頃。一カ月余りの長い長い旅路。食べる物とて少なく、飢えと下痢とシラミ、そして寒さが近づく。

二十年十一月十日、イルクーツクに送られて下車してみればもう雪。敗者とはこんなものかと思う。収容所に入れられるが、ベチカが燃えて暖が取つてある。だが一夜明ければもうラポータ。ソ連兵が連れに来る。雪の中かなたに丘があり、そこで何日も何日も樹木の伐採作業。栄養失調で遂に倒れる者が出始める。歩けない者、手でズボンを持って引き上げながら歩む者。あちらこちらで伐採木が倒れてくるが、栄養失調と深い雪で逃れられない。声を掛けてもだめ、ついに下敷きとなって死亡する戦友。地獄とはこれを言うのかと思つた。

伐採作業も二カ月余で終わり、丘を降り街の中でのビル建設、毎度ながらのノルマ完遂でよくぞ身体が保つたもの。倒れる者が多くなる頃やつと軍医が診察に来る。病める者は入院、少しでも働ける者は軽作業で他方へ、丈夫な者はこと、軍医が決を下す。抑留者の点呼はソ連兵によって行われ、朝夕の作業所では現場監視員が行う。兵隊も監視員も案外気さくに笑いながらで異変は無く、助かつたようだった。でも寒さには弱つた。零下三十度、三十五度、時には四十度以上の日も。風が強ければそれ以上にもなる。でもよくしたもので、厳寒にはそれに適した着衣が用意されており、支給されていた。支えになつたのは、収容所で内地へ帰るまでは何としても生き抜くんだと手を取つて励まし合つたことだった。やがて帰還の話が耳に入るようになった頃作業は無くなり、洗脳教育が始まつた。とにかく帰還したいの一心、ソ連ブラボーで数日過ぎると、ダモイ東京が収容所で言い渡された。

二十二年五月イルクーツクからナホトカへ出発、体調のよくない者から汽車に乗せられナホトカに向けて

出発。でもなぜなのか五、六人の戦友が残された。心残りだったが、致しようもなく残念だった。

五月十一日ナホトカ港に着く。そして五月十二日ナホトカ港前方に日の丸の船が見えて来た。船腹に遠州丸と書いてある。これを見た時の喜び、飛び上がって喜んだが、凍土に散った友を思い、手を合わせた。

五月十五日舞鶴港に上陸と同時に検疫を受け宿舎に入り、色々と手続きを済ませ、お互いが亡くなった戦友、残された戦友の話をしながら日本の夜を迎えた、戦友の安かれを祈りつつ。

五月十七日なつかしの滋賀の里へ帰郷した。

## 抑留記

京都府 長 曾 修

当時の住所京都府船井郡園部町から、昭和十六年二月二十一日、現役召集で満州国黒龍江省佳木斯<sup>ソウマース</sup>の関東軍独立守備隊四四一部隊へ入隊しました。極寒零下四

〇度の北満で厳しい初年兵教育を受けました。

その後、ソ連との国境付近にある同江、富錦、鶴崗などの警備にいました。

昭和二十年八月十五日終戦。八月十八日、佳木斯においてソ連軍により武装解除されました。

十月中旬、アムール河を渡りソ連のハバロフスクに入りました。

新京、奉天方面は国民党軍と中共軍が戦争をしているので日本兵はウラジオストック経由で日本へ帰されるのだというデマにだまされて、四年間もソ連復興の手助けをすることになった次第です。

ハバロフスクの北方イズベストコーワヤという森林地帯の収容所で三百人余が毎日山に入り伐採と運搬です。亭々とそそり立つ大木を二人引きののこぎりですり倒します。轟音とともに倒れる凄まじさは恐怖あるばかりです。これを運べる長さに切つて製材所へ運ぶ作業が二年半毎日毎日繰り返されました。

この作業のノルマが厳しく、腰近くまで雪が積もっても警備兵にダワイ・ダワイと追い立てられます。食